

脚本・監督:

梶野純子&エドワードコジアースキー

純子とエドワードは、アメリカ長編映画のプロデューサー、企画、マネージャーとして過去10年にわたりチームとして活躍。また、ドキュメンタリー、短編、コマーシャル、ミュージックビデオにおいてその製作のキーパーソナルとしても活動する。純子とエドワードは2005年、短編映画「Homesick Blues」の脚本、監督を務める。映画「Homesick Blues」は、シカゴ国際映画祭、ハワイ国際映画祭ニューヨークフィルム&ビデオ国際映画祭、アムステルダム国際映画祭、ミッドウエスト映画祭、などほか多数の国際映画祭正式招待作品。2005年シカゴインデペンデント映画協会にて、最優秀賞ベストフィルムを受賞。



梶野純子、1974年長野県生まれ。1996年に単身渡米し、英語と異文化の厳しさを身をもって経験しながら、エド・ラドキ(映画監督「The Dream Catcher」1998年ロスサンゼルス映画祭最優秀監督賞、「The Speed of Life」2007年ベネチア映画祭Queer Lion受賞)監督の元に弟子入りする。その後、コロビアカレッジシカゴ映画学科で修士号を得る。



パートナーであるエドワード・コジアースキーは、シカゴ出身。19歳にして「フールズ・ガンビット」(82分)の長編映画をユニバーサルスタジオからの支援のもと脚本、監督を務める。ほかに多くの映画雑誌、ネットマガジンに多くの記事を出版する。2007年、アメリカインデペンデント映画協会のラフカットラボ10作品に選ばれ、ニューヨークを中心に映画の完成と市場へ向けてのサポートを得ている。

あらすじ

沖縄に駐屯する米兵ネルソンとカーターは、ある暑い夏の日、学校帰りの一人の少女レイを誘拐し暴行する。2人の兵士は暴行した後、少女レイを海に置き去りにする。レイは奇跡的に助かる。

沖縄を、日本を揺らした暴行から10年、レイは消えない痛みと悲しみを抱え、釈放され自由の身となった兵士2人に直面するためアメリカへ渡る。

初めて行く異国の土地アメリカ。工場地帯に下流階級の住民が住む地域に足を踏み入れるレイ。甦る10年前の恐怖。レイは兵士に直面することの難しさを全身に感じながら、目的を達成しようとする。

兵士、ネルソンの家の前でただ観察するレイ。家のドアから顔を出すネルソンを10年ぶりに見るレイは震えが止まらない。その直後に現れる若い少年。ネルソンの一人息子、パリス。

10年という長い期間をレイはたった一人で痛みを抱えてきたのに、この兵士は何事もなかったように息子と暮らすことが可能であることを目の当たりにし、レイは混乱する。その何日か後、レイはパリスを誘拐してしまう。

パリスを誘拐しモーテルに監禁し始めたレイは、ネルソンのすべてを聞き出そうとする。しかしパリスが父親ネルソンの過去について何も知らないことにすこしずつ気づき始める。ショックを隠せないレイ。また同時にレイは純粋な少年パリスへ憧れと妬みを抱くようになる。

小さなモーテルの部屋に理由もなく監禁されたパリスは、まもなくレイへと反抗し始める。何かを隠すレイの態度に興味と同時に怒りを隠せないパリス。そしてパリスを監禁しきれないレイの繊細さと優しさがパリスを少しずつ変えてゆく。2人はぎこちなくまた不思議な関係を築き始める。それはパリスが、レイの口からパリスの父親の過去を聞かされたときに大きく動きだし、パリスの将来だけでなく、ネルソン、レイの将来までも変えることになる。